

群 教 七	F08 - 01
	平29.265集
	生徒指導

児童の自己有用感を高めるための指導の工夫

——「たてわりスマイルカード」を活用した

互いに認め合う活動を通して ——

特別研修員 荻野 和明

I 研究テーマ設定の理由

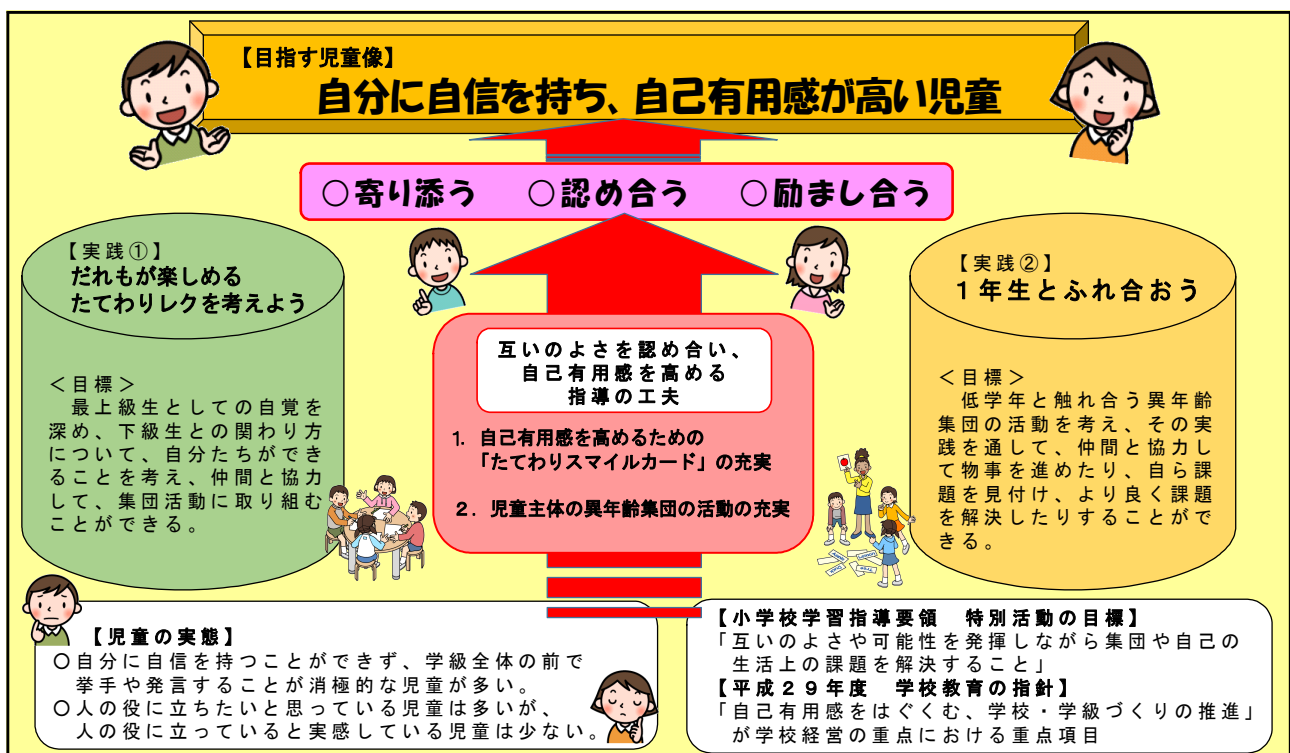
小学校学習指導要領（文部科学省，平成29年3月告示）の特別活動の目標には、「互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決すること」と示されている。また、平成29年度学校教育の指針（群馬県教育委員会，平成29年4月）では、「自己有用感をはぐくむ、学校・学級づくりの推進」が学校経営の重点における重点項目として挙げられている。

平成29年4月に本学級の児童を対象に実施したアンケート調査では、97%の児童がクラスが楽しいと感じているが、「友達をもっとつくりたい」「友達が自分をどう思っているのか気になる」と回答した児童は65%を超えた。さらに、53%の児童が「他の人から認められたい」と回答したが、「自分が人の役に立っている」と回答した児童は、16%に過ぎなかった。また、授業中では、決まった児童しか全体の前で発言しておらず、各自が自分の考えをノートに書くことはできるが、挙手や発言できない児童が多いという実態がある。このように、自分の思いや考えを持つことはできるが自分に自信が持てない児童が多く見られることが分かった。

これらのことから、本学級の児童に対して、互いのよさや可能性を認め合いながら、自己有用感を育むことは喫緊の課題であると言える。また、平成29年度学校教育の指針（解説）では、自己有用感を育むポイントに「異年齢交流」が挙げられている。そこで、6年生の児童が主体となる異年齢集団の活動において、互いの頑張りやよさを認め合う活動を取り入れていくことで、児童一人一人の自己有用感を高めたいと考え、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

児童が自分に自信を持ち、児童一人一人の自己有用感を高めるために、次の二つの手立てを講じた。

手立て1 自己有用感を高めるための「たてわりスマイルカード」の充実

手立て2 児童主体の異年齢集団の活動の充実

手立て1は、異年齢集団の活動であるたてわり活動を通して、児童一人一人が自分の役割を果たし、他者との関わりとその関わりを通じた他者からの評価によって、自己有用感の向上につなげることを目指している。そこで、「たてわりスマイルカード」に、活動のめあてや活動内容、自分の役割を記入する欄だけでなく、下級生や担任から感謝の言葉や頑張った証のスマイルシールをもらうことができる欄、同級生同士で互いのよさや頑張りを記入することができる欄を作成する。そして、たてわり活動を行うたびに、「たてわりスマイルカード」を活用して振り返りをし、互いに認め合うことで、自分も人の役に立っていると実感することができ、自己有用感を育む一助になると考える。

手立て2は、児童一人一人が主体的、計画的に活動することによって、他者からのプラスの評価を得ることができ、自己有用感の向上につなげることを目指している。そこで、事前に異年齢集団の活動に向けての話合い活動の場を設定し、たてわり団ごとに必要なことや物を考え、判断し、工夫を凝らして準備をしていくことで、主体的に活動へ取り組めるようにする。また、掲示物やロールプレイ等を活用しながら、たてわり活動に取り組むことで、児童が見通しを持って活動に参加することができると思う。

このようにして、「児童主体の異年齢集団の活動」と「たてわりスマイルカード」の充実を図ることで、自他の頑張りのよさに気付くことができると考える。さらに、その気付きを互いに認め合うことで自己有用感を育むことができると考え、実践を行った。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 実践後に実施したアンケートでは、「仲間の役に立つことができた」と回答した児童が93%、「1年生の役に立つことができた」と回答した児童が98%という結果であり、このことから、児童の自己有用感を高めることができたと思う。
- 「たてわりスマイルカード」の振り返り欄に、自他の頑張りを記述したり、頑張った証であるスマイルシールを貼ったりする欄を作成したことで、自他のよさを互いに認め合うことができた。
- これまでの異年齢集団の活動ごとに、「たてわりスマイルカード」を活用した互いに認め合う活動に継続して取り組んできたことで、クラス内で助け合う場面が増えたり、休み時間などでも下級生の面倒を見たりする姿が見られるようになった。
- 児童一人一人が自分の役割を持ち、異年齢集団の活動に取り組んだことで、普段の生活では、ほとんど発表しない児童も自分の意見を発表したり、活動に向けてルール説明の仕方や1年生に対する自分たちの動き等について、互いに声を掛け合ったりして、進んで実践する様子が見受けられた。

2 課題

- 少数ではあるが、人の役に立っていると実感できない児童もまだいることが分かった。今回の授業実践や異年齢集団の活動だけでなく、日頃から、一人一人が活躍できる場、自分も人の役に立っていると実感できる場をつくることで、児童一人一人の自己有用感を育てていきたい。
- 「たてわりスマイルカード」では、どこに記述したらよいか悩む児童もいた。授業の流れに沿ったものに改良し、互いに認め合う活動のさらなる充実を図りたい。また、個人目標の欄も設け、「自分のこんな力を伸ばす、そのために、こんなことをする」等を考え、実践し、それについての振り返りもしていくことで、学習意欲や自己有用感のさらなる向上へつなげていきたい。
- 児童の自己有用感は継続した成功体験が必要であると思う。今後も、教職員間の連携を深め、互いの頑張りのよさを認め合う活動を継続的・組織的に行っていくことで、児童一人一人の自己有用感をさらに高めていきたい。

実践例

1 題材名 「1年生とふれ合おう」(第6学年・2学期)

2 本題材について

本題材は、自分たちで計画した異年齢集団の活動を通して、児童一人一人が自分の役割を果たし、他者との関わりとその関わりを通じた他者からの評価によって、「周りから必要とされていること」や「自分も人の役に立っている」と実感し、自己有用感の向上につなげることをねらいとしている。

他者からの評価活動では、「たてわりスマイルカード」を活用した互いに認め合う活動を取り入れることで、同級生や下級生の役に立っていることを実感し、児童一人一人の自己有用感を高めていくことができると考える。また、「たてわりスマイルカード」を校内に掲示することで、児童たちの気付きやよさを可視化し、児童同士の望ましい人間関係の構築へとつなげることができると考える。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	低学年と触れ合う異年齢集団の活動を考え、その実践を通して、仲間と協力して、物事を進めたり、自ら課題を見付け、より良く課題を解決したりできるようにする。	
評価 規 準	関心・意欲・態度	学級や学校の生活の充実と向上に関わる問題に関心を持ち、他の児童と協力して、自主的に集団活動に取り組もうとしている。
	思考・判断・実践	楽しく豊かな学級や学校の生活をつくるために話し合い、自己の役割や責任、集団としてのより良い方法などについて考え、判断し、信頼し支え合って実践している。
	知識・理解	楽しく豊かな学級や学校の生活をつくることの意義や、学級集団としての意見をまとめる話し合い活動の効率的な進め方などについて理解している。
過程	時間	主な学習活動
事前の 活動	問題の発見 議題の選定 問題の意識化	<ul style="list-style-type: none"> 異年齢集団の活動を行う目的を理解し、自分の役割や活動内容を話し合いを通して、決定していく。 仲間と協力することの大切さを再認識するため、異年齢集団の活動の準備やリハーサルを行う。
本時の 活動	出し合う 比べ合う まとめる	<ul style="list-style-type: none"> 各たてわり団で事前に計画した1年生と触れ合う異年齢集団の活動を実践し、振り返りを行う。
事後の 活動	実践	<ul style="list-style-type: none"> たてわりレクやたてわり清掃などの異年齢集団の活動を通して、集団生活の意義を理解し、仲間と協力して生活し、互いを認め合う。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は、話し合いで計画した異年齢集団の活動を自他の役割を考えながら、実践し、互いの頑張りやよさを認め合うことで、人の役に立っていることを実感することがねらいである。本時は、運動会を成功させた後、すぐに行われた異年齢集団の活動である。運動会を通して、児童は一回り大きくなり、その成長した力を生かすのに本時は絶好の機会である。この活動の中で、児童の自己有用感を高めるためには、児童の主体性を高めること、そして、主体的・計画的に行った活動を振り返り、互いに認め合うことが不可欠であると考え、主に二つの手立てを講じた。

手立て1 自己有用感を高めるための「たてわりスマイルカード」の充実

- ・1年生から感謝の言葉やスマイルシールをもらうことで、自己有用感を育む一助とする。
- ・6年生同士で互いに励まし合い、自他の頑張りやよさを認め合うことで、自己有用感を高める。

手立て2 児童主体の異年齢集団の活動の充実

- ・掲示物やロールプレイ等を活用することで、見通しを持って行動できるようにする。
- ・事前に異年齢集団の活動について話し合う場を設定し、たてわり団ごとに必要なことや物を考え、判断し、工夫を凝らして準備をしていくことで、主体的に活動へ取り組めるようにする。

4 授業の実際

(1) 事前の活動

- ① 児童が司会による話し合い活動（図1）を通して、1年生と触れ合う異年齢集団の活動の目的や最上級生としてできる自分の役割について、一人一人が考える。
- ② 話し合いでの意見をふまえ、自分の役割や活動のめあてを個人用の「たてわりスマイルカード」（図2）へまとめる。
- ③ たてわり団ごとに、活動に必要なことや物を考え、判断し、工夫を凝らして準備をしていく（図3）。



図1 話し合い活動の様子

(2) 本時の活動

- ① 活動の流れが分かるように、司会の児童が本時の学習のめあてや本時の流れなどを説明する。
- ② たてわり団ごとに計画した1年生との触れ合いについて、自他の役割を意識しながら、支え合って活動していく（図4-a, b）。
- ③ 本時の学習を振り返る。1年生から6年生への感謝の言葉をもらいながらスマイルシールを「たてわりスマイルカード」に貼ってもらいながら、6年生同士で仲間の頑張りや感想等を付箋紙に記入する。その後、記入したメッセージを一言添えながら、渡し合う。各自で仲間から渡された付箋紙をたてわりスマイルカードに貼り、振り返ることで次時の異年齢集団の活動へつなげていく（図5-a, b, c）。

たてわりスマイルカード（1年生との触れ合い 個人用）				
のり	画	文	書	記
話し合い	（1年生）	（2年生）	（3年生）	（4年生）
活動のめあて				
活動内容、大まか、活動のよさ				
活動の役割				
活動の振り返り （自分が頑張ったこと）	活動のメンバーからのメッセージ （よさかたちを）			
1年生からのメッセージ		6年生からのメッセージ		

図2 たてわりスマイルカード



図3 事前の準備の様子



図4-a 異年齢集団の活動の様子



図4-b 異年齢集団の活動の様子



図5-a 振り返り活動の様子



図5-b 振り返り活動の様子



図5-c 振り返り後のたてわりスマイルカード

(3) 事後の活動

- ① 担任からのメッセージとして良かった点や次時の異年齢集団の活動に対する期待を「たてわりスマイルカード」に記入し、それを自他で共有し合う。また、そのカードを校内へ掲示していき、児童たちの気付きやよさを可視化する（図6）。
- ② 設定された異年齢集団の活動の時だけでなく、休み時間にも他学年の児童と交流をしていく。



図6 校内での掲示の様子

活動後の児童の感想（たてわりスマイルカードより）

<1年生からの感想>

- ・いろいろな遊びができてすごく楽しかった。またやりたいと思った。
- ・ゲームでは負けて悔しかったけど、とても楽しかった。

<同じ団の仲間からのメッセージ>

- ・1年生がとても嬉しそうにしていたね。1年生の面倒をしっかりと見ていたよ。
- ・1年生のことを考えながら行動し、自分の役割もしっかりやっていたのですね。良かったですね。

<6年生、自分自身の振り返り>

- ・1年生が紙手裏剣や紙飛行機をもらって、すごく喜んでくれたのでとても嬉しかった。これからも休み時間など、1年生と触れ合う時間が増えるように積極的に声をかけていきたい。
- ・1年生にやさしく接したり、自分の担当もしっかりと果たしたりすることができ、頑張れました。これからも低学年に対する接し方をしっかり考えて生活していきたい。また、もっと自分から進んで仲間のためになることができればと思っているので、困っている人がいれば助けたい。
- ・仲間と協力してできたので良かった。また、「模造紙に書いた字が読みやすかった」と、仲間から言われたので嬉しかった。これからも仲間の役に立てることをしていきたい。

参観者の感想

- 子どもたちが主体的に考え、自分の役割を自覚し、全員が一つの気持ちで取り組んでいた。一人一人にやり方の説明や審判など、役を任せただけは本人の自己有用感につながったと思う。
- 1年生だけでなく、同学年や担任からのフィードバックがあるのは自信につながると思う。また、6年生が1年生の様子を見ながら上手くできない子にもう一度チャンスを与える、ルールを易しくする等、臨機応変に対応していたので、活動の目的もしっかり意識できていたと思う。
- 振り返りシートに全体の目標と個人の目標があると良い。個人目標では、協力する力、企画する力など、「自分のこんな力を伸ばす」ことを考え、そのことについての自己評価、友達からの評価、先生の評価が自己有用感の育成につながると思う。
- 活動の見通しをさらに持たせるために、1年生と遊ぶ時の進行計画表があると良い。活動時間が伸びてしまったので、残り時間のアナウンスがこまめにあると、時間も意識して活動できる。

5 考察

「たてわりスマイルカード」を活用して、振り返り活動をしていくことは、自分の考えや思いを上手く伝えること、相手のことをよく考えた表現をすることにも意識が向き、児童同士の望ましい人間関係の構築へもつながっていくと考える。「たてわりスマイルカード」での自分自身の振り返り欄には、「1年生が喜んでくれたのでとても嬉しかった」「次はこうしたい」「これからも1年生のために～したい」等、プラスの意見が多く書かれていた。また、下級生からの感謝の言葉、同学年や先生からの励ましの言葉など、周りのたくさんの人からメッセージをもらえたことで、自分も他者から認められたと感じ、自己有用感の向上につながったと考える。活動後に実施したアンケート結果に、「仲間の役に立つことができた」と回答した児童が93%、「1年生の役に立つことができた」と回答した児童が98%と4月末に比べてかなり上昇したことから、多くの児童が、人の役に立っていることを実感することができたと考えられる。以上のことから、「たてわりスマイルカード」を充実させ、さらに、異年齢集団の活動を活性化していくことは、児童一人一人の自己有用感を高めていく上で重要であると考えられる。

しかし、課題としては、1年生と6年生との振り返り活動時に、自分の思いをきちんと伝えられない児童も見受けられた。全員が自分の思いをきちんとアウトプットできるように、まずは、ペアでの発表を取り入れる必要があると考える。また、「たてわりスマイルカード」に記述する内容を精選するとともに、今後も互いの頑張りやよさを認め合う活動を継続的、組織的に行っていくことで、児童の自己有用感をさらに高めていきたい。